堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

堀川沿いの好生館病院と愛知県病院 横井信之と後藤新平

横井信之　27歳で名古屋鎮台病院長

軍医監の横井信之

西洋医学を修め文部医学校助教から軍医に

東海地方初の西洋式医学塾は、江戸の松本良順に師事後長崎で最新医学を学んだ近藤坦平が明治5年（1872）碧海郡鷲塚村（現：碧南市）に開いた、私立の蜜蜂義塾である。この医塾と併設の洋々堂（後に洋々医館）は、愛知医学校が軌道に乗るまでの間、矢作川水運の川湊鷲塚の地で医学生の育成にあたり200余名の開業医を輩出した。

横井信之は弘化4年（1847）、犬山成瀬家の家老を祖とし同じ碧海郡で安城の医家の五男に生まれた。長じて佐藤尚中と松本良順に西洋医学を学び、戊辰戦争に際して帰郷し福釜（ふかま）（現：安城市福釜町）で開業した。その後文部医学校等で教え、陸軍軍医となり明治7年2月の佐賀の乱に労あって同年8月、名古屋鎮台病院長に着任した。

12年3月から翌年5月まで愛知県病院長・医学校長に就くが体調を崩し辞任。回復ののち私塾「好生舎」を設立し、さらに17年に私立病院「好生館」を開業した。24年5月金沢で倒れ22日に病院近くの自宅で44歳の人生を閉じた。その年10月の濃尾地震に際しては、信之の薫陶をうけた好生館病院のスタッフが医療班として活躍している。

好生館医員が枇杷島町に出張し震災負傷者を治療（個人蔵）

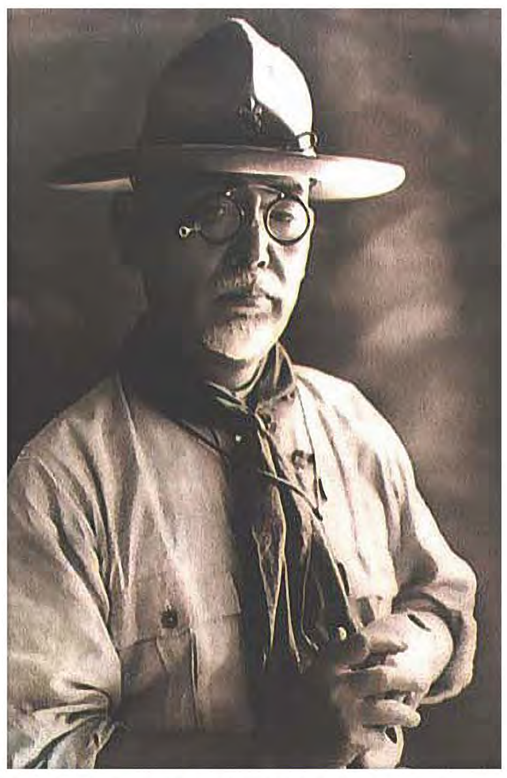
病院は昭和20年（1945）の空襲まで開業して、今でも病院跡に建つホテルナゴヤキャッスルの北側には当時の建物のレンガ壁が残っている。

名古屋で私塾と私立病院を開設、後藤新平を世に出す

愛知県医学校長の頃、西洋医学の医師養成の必要を痛感し、自宅内に私塾を設けて講義と治療を行い、後進の啓発と育成に務め、声望が高まり病院の開業に至った。

軍医監の石黒忠悳（ただのり）が名古屋鎮台病院へ巡検に来た時、横井信之が「愛知県病院の優秀な青年」として後藤新平を紹介。西南戦争で大阪陸軍臨時病院開設の際、院長は石黒、副院長は横井、新平は一旦辞職して参加、決断と働きが評価され将来の飛躍への人脈を掴んだ。

後藤新平　愛知県病院と医学校の内容充実に邁進


ボーイスカウト姿の後藤新平

帰還兵がもたらす衛生問題で大検疫を実践

後藤新平は安政4年（1857）に水沢藩（岩手県奥州市）の武家に生まれ、胆沢県大参事・安場保和に目をかけられ書生として県庁に勤務した。彼の支援を受け福島の須賀川医学校を卒業後、愛知県令となった安場の誘いで明治9年（1876）愛知県病院･医学校に三等医として就職し、医師としての人生を始めた。後藤新平19歳の時である。明治13年に病院長・医学校長の横井信之が体調を崩して退任すると、若くして病院長・校長代理となる。その後弱冠25歳で病院長兼医学校長になり、東大卒の4人を採用し態勢を整え、国立大学への布石ともなった。

愛知県病院･医学専門学校　（愛知県写真帖　明治43年）

日清戦争終結後の帰還兵への大検疫作戦を、西南戦争の臨時病院での後藤新平の働きを知る石黒忠悳から指名され、医療専門家の事務官長になり陸軍少将児玉源太郎（検疫部長）と組んで、広島、山口、大阪の3か所で船舶687隻、23万人に実施した。今の価値換算で1兆円を超える大事業だった。このコンビがのちに台湾総督府においても再現されることになる、歴史的出会いであった。

人を育て、活かした人

お雇い医師のローレツ（オーストリア）から衛生の重要性を学び、県と国に建白書を出し、内務省衛生局入りを果たした。その後、衛生局長、台湾総督府民生長官や、南満州鉄道総裁を歴任することとなる。逓信相時代には、先取りで木曽川の発電と材木の運搬方式を検討させ、支流は軽便鉄道敷設で本流は官線鉄道に直結するという方式が報告されていた。福沢桃介は木曽川水系の電源開発に関して後藤新平の意見を聞いている。さらに内務大臣、外務大臣、東京市長などを歴任。昭和4年に3度目の脳溢血により72歳で没した。

自治三訣を唱え、教育に力を入れ、台湾協会学校や日露協会学校（その後ハルピン学院）、ボーイスカウト連盟を創設、杉原千畝などに影響を与えた。木曽材の運搬方法を検討させた技師渋沢元治は、のちに初代名古屋帝大総長になっており、ほかにも事例は多く、人を活かした人と言われた。